

令和元年度 自己評価表

鳥取県立琴の浦高等特別支援学校

中長期目標 (学校ビジョン)	○社会の中で自立して生活ができる力の育成 ○職業生活に必要な意欲と能力の育成 ○豊かな人間性、たくましく生きるための心と体の育成	今年度の 重点目標	職業的自立と主体的な社会参加に向けた確かな力の育成 琴の浦教育検証プロジェクトに基づいたカリキュラムマネジメント 地域との協働による魅力的な学校づくり
-------------------	--	--------------	---

評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初			評価結果 (3月末)		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
社会人・職業人としての基礎的な力の育成	○基本的生活習慣の確立 (指導部・学年部、学科部、寮務部)	○多くの生徒がSNSを利用し、夜遅くまで長時間使用したり、トラブルにつながってしまうことも多い。 ○睡眠時間の不足や人間関係の悩み等から生活リズムが崩れたり、学習に向かうことができなかつたりする生徒もいる。	○携帯電話等の使い方についてのルールを守る意識を高めるための取り組みを行う。	○「我が家家のルール」や「決意表明」を作成し、個々に応じたルールを定めたり、定期的な見直しを行ったりする。 ○個人懇談等を通して家庭と情報共有を行う。 ○講演会や学年集会等で定期的に情報モラルに関する指導を行う。 ○教職員を対象とした情報モラル研修を実施する。	○年度初めと年末に「我が家家のルール」の見直しを行い、保護者とともに再度ルールの確認を行うことができた。また、「決意表明」は定期的に評価・確認を行った。 ○外部講師を招き、生徒及び教職員のそれぞれを対象とした講演・研修会を実施した。近年のネットトラブル等の状況を確認し、携帯電話等の使い方について考える機会となつた。	A	○個々に決めたルールの確認や見直しの時期を検討し実施する。 ○今後も具体的な事例を題材としたネットトラブル等の学習や研修を設ける。
	○基本的生活習慣を取り入れた「専門教科共通目標」を生徒に尋ねてもきちんと答えられる生徒が多くない。	○専門教科共通目標が社会人として必要なことであると生徒が理解し、各学年目標に到達しようと常に意識している姿が見える。	○各コースの実習で、専門教科共通目標の項目を復唱したり視覚的補助を行い理解を深める。さらにふりかえりシートの活用を促し、年間を通して指導を徹底する。 ○全職員が自ら見本となるような動きを生徒に見せる。	○教室掲示を行い、毎回の振り返りを行って理解する生徒が増えた。 ○職員の意識が高まり、生徒の見本となる行動が多くみられるようになつた。	B	○今後も徹底して繰り返し指導する。	
	○声かけなどの起床の支援をすれば、起床時間に起きることのできる舍生が8割程度いる。	○自覚まし時計などを利用して、8割の舍生が自力起床できる。	○自力起床強化期間を設定し、自分で起きる習慣の定着を図る。	○現場実習前、長期休業明けをなど年間に3回自力起床強化期間を計画して自覚を促し、自分で起きる習慣の定着を図った。1回目81%、2回目86%と回を追うごとに全体的な意識も高まり自分で起きるのが当たり前の雰囲気が作られてきている。	B	○一定期間の実施の中で自力起床の習慣がつくように支援を減らし、自主性に任せようとする。自主的に起きることができない舍生については、本人と相談しながら引き続き個に応じた支援に取り組んでいく。	
	○学習における基礎・基本の徹底 (研究研修、教務部)	○大多数の生徒が守れているが、「学習のルール」が日がたつにつれて指導者・生徒ともに曖昧になることがある。	○授業準備、チャイム着席、授業のあいさつは年間を通してできている。 ○姿勢、発表は生徒アンケートの結果が前期に比べ後期は向上している。	○全ての教室に「学習のルールを」を掲示するとともに、将来に繋がることを理解させ継続的な指導を行う。 ○学習規律を高め、良い授業づくりのための学習環境を再点検し整える。 ○授業に集中できない事が多くなった場合は、生活習慣が整えられるよう保護者と連携を図ったり、対処方法を指導者が共通理解し共通実践したりする。	○前後期とも準備、チャイム着席、あいさつは9割、発表は7割の生徒が守れたと回答した。 ○姿勢は後退し、7割を切った。慣れに対する継続的な指導と学習に向かう雰囲気作りが必要である。	B	○落ち着いた雰囲気作りをするために、余裕を持った時間着席と朝読書を徹底する。 ○わかりやすい授業を展開し、集中力を高めるために学習内容や教材を検討をする。
	○職員がそれぞれの担当教科を熱心に指導しているが、系統立てた支援ができるまでには至っていない。	○職員の授業力を向上させ、生徒に「わかる授業」「できる授業」を提供する。	○スーパーバイザー派遣事業研修を活用し、職員全体で研修会を2回実施する。	○ほぼ全職員が参加しての授業研究会及び研修会の実施ができ、おおむね職員の評価も分かりやすい、今後の指導に参加しやすいという意見であった。	B	○授業改善については職員の関心が高いので、参観した授業が今後の授業に生きるような研修会を検討し、実施する。	
	○ライフスキルの育成 (進路部)	○自己理解が難しく、進路選択がうまくできない生徒がいる。 ○働く心構えが不十分なままに就職してしまう生徒がいる。	○生徒が卒業後の生活について具体的に考え、必要な内容に意欲的に取り組んでいる。	○進路行事の内容を見直し、将来について自分で考え、行動する機会を設定する。 ○卒業生の就職先から情報を収集し、必要な指導についてまとめ、職員研修、通信等で発信する。	○学年が上がるにつれ、具体的に考えられるようになり、3年生は12月までに約9割の生徒の進路が決まった。 ○年間を通じての進路ミニ研修、8月と1月に職員研修を実施した。また、卒業生の状況について定期的に進路便りを発行し、進路指導について考えるよい機会となつた。	B	○今後も職員全体で卒業生の定着支援等の情報を共有し、必要な指導について話し合えるような機会を設定する。
	○職業的スキルの伸長 (学科部)	○進路先からのニーズとしてフォークリフトの運転資格を持つ生徒がいないか、との要望がある。	○講座の受講だけで運転可能となるフォークリフト(1t未満)の運転資格を取得する生徒がいる。 ○積極的に受検し、練習に真摯に取り組んでいる。	○綿密な受講計画を立て、生徒の合格意欲が維持できるように工夫する。	○予定数を超える受講希望生徒となった。座学・実技ともに真剣に取り組む姿勢が見られ、全員合格となつた。	A	○実施日の調整や、見守り担当職員などの役割分担などを検討し、もっと実施しやすい環境を整える。
	○現場実習での課題について専門教科での学習で解決するような連携が十分に取れていない。	○生徒個々の課題を容易に進路部と学科部が共有し、進路実現のための連携がより進む。	○生徒個々の課題を端的に共有できるような方策を進路部及び学年部と協議し見つける。	○現場実習での課題を各コースで共有することはできている。	C	○進路実現のための課題について、コース内で統一した指導が可能となる方策を考える。	
	○各コースで地域産業との連携を進めているが、社会人としてどういうふうに評価されているかを把握している生徒はまだ多くない。	○地域の産業と携わり協働することで、他者からの評価を得て、自分の今後の目標を立てることができる。	○協働する際に、生徒への評価のシート記入をお願いし、専門共通目標の他者評価を専門教科実習に活かす。	○他者評価を記入するための共通のシートを、コースごとに目的が異なる場合でも集約したものを作成することに取り組んだが、完成するに至らなかつた。	C	○学年別到達目標を明示し、社会人としてみた場合の評価を簡潔に評価記入できるシートを作る。	

様式2 地域で生きる力の育成	○自治活動の推進 (指導部、寮務部)	○生徒会活動や学校行事において、司会や運営等、年間を通じて生徒が携わる場面が増えている。	○生徒が主体的に活動や行事の企画運営に係ことができること。	○生徒主体の自治活動となるよう活動の目的や課題を確認し、計画的に話し合う機会を設ける。 ○生徒会執行部会を定期的に開催し、生徒間での相互評価に取り組む。	○各委員会の活動内容を共有することで、生徒会を中心とした委員会運営もでき始めている。 ○生徒会執行部が主体となり、学校の課題を全校に伝えるための臨時の会を開設し、主体的に自治活動に取り組む意識が高まっている。	B	○各委員会等から挙げられた学校の課題を議題とした話し合いの場を設ける。 ○年間の限られた時間の中での生徒会執行部会の開催の仕方について工夫する。
	○寄宿舎が過ごしやすい場となるように自治会でスローガンを掲げ、達成するための月目標を決めているが、個人でできる取組を考えるのみで、全員で取り組んだり振り返ったりする機会がない。	○舍生全員で具体的な取組を考え実践し、8割の舍生が月目標を達成できている。	○部屋会やリーダー会などで、みんなが意見を出しやすい仕組みや環境を整える。 ○3役や部屋長と連携し、自己評価の共有や取組内容を決め、支援する。	○3役が中心となって、率先して行動したり、声かけを行ったりしたことで、8割の舍生が月目標を達成できている。 ○自己評価を全員で共有する場を設けた他に、客観的評価も加えた結果、意識して実践する姿が見られるようになったが、変化の見られない舍生も数名いる。	○3役や部屋長が中心となって月目標が達成できるよう、引き続き支援していく。また、目標が達成できない舍生に対しては、自己評価表を活用し、個別に支援を行う。	A	○3役や部屋長が中心となって月目標が達成できるよう、引き続き支援していく。また、目標が達成できない舍生に対しては、自己評価表を活用し、個別に支援を行う。
	○生涯体育、文化、芸術活動の推進 (主幹・部活動等)	○休日に運動したり、地域のスポーツクラブや文化活動をしている生徒は少ない。	○地域のスポーツクラブ・文化芸術活動サークル等への参加方法がわかる。	○障がい者スポーツ担当者・部活動担当者が中心となって、各種イベント参加や出展参加を促す。 ○大会参加方法や活動状況を掲示したり、発表したりし生徒に情報発信していく。 ○外部団体等との連携を図り体験活動やクラブ参加を推進する。	○PTA研修で障がい者スポーツ協会に加盟する方法について説明会を行った。 ○鳥取県版障がい者スポーツのガイドブックが作成され図書館に置いたり生徒には隨時機会を設けて話をすることができた。	A	○障がい者スポーツを紹介し、意欲付けを図る。 ○各種スポーツ大会の参加案内等をHPに掲載することに取り組む。
教職員の専門性・授業力・組織力の向上	○教育課程の見直し (研究研修・教務部)	○教科会は毎年実施しているが、各教科間の連携（横断的連携）は十分とは言えない。	○生徒が「わかる」「できる」授業を実感し、学習意欲を高め、生活に学んだことを活かしている。	○新学習指導要領を踏まえて年間指導計画及び教育課程について見直し、検討する。	○6月、7月、11月の研修会を基に10月、12月、2月に教科会を設定し、教育課程及び年間指導計画の検討を行った。 ○参考資料となるように指導要領一覧を配布した。	B	○学習指導要領に沿った学習内容が適切に指導計画の中に取り入れられ、指導されているかを検証する。
	○地域資源を活かした教育活動の推進 (総務部・支援部)	○学校関係者評価や学校評議員制度により学校運営に関する意見をいただきていきた。	○コミュニティー・スクールとして学校、地域関係者が連携・協働体制を確立する。	○スケジュールに基づき、計画的に組織を立ち上げ、運営を行う。	○学校運営協議会を立ち上げ、会議を開催し、運営委員と連携・協働についての体制を確立した。	A	○学校運営上の連携・協働の在り方について具体的にする。
	○学校や企業に対し、「琴の浦の教育」について十分に伝わっていない。	○「琴の浦の教育」の理解を進めるための取り組みを、工夫して行っている。	○就労による社会自立に向けた指導・支援について研修の場の設定。 ○学習場面への参加や公開による啓発活動の実施。 (学校説明会、オープンスクール、企業参観日等)	○一定の参加者を集めた中、授業場面で生徒と関わる機会の設定や、本校教育についての情報提供、テーマに基づいた協議等行った。	A	○今後さらに関心を持つて参加してもらえるよう、企画や発信内容等を工夫する。	
○組織的な指導・支援、対応力向上（総務部）	○校内研修を計画的に実施し、教職員としての専門性を高めることが必要である。	○多くの教員が研修に参加し、専門性を高めることに取り組む。 ○コンプライアンスの意識を常に持ち、職務の遂行にあたる。	○初任研やエキスパート教員の公開授業、自主研修等に参加する。 ○終礼や長期休業中にコンプライアンス研修を実施する。	○初任者研修、進路ミニ研修、エキスパート教員公開授業、自立活動研修、情報モラル研修を実施し、多くの教職員が研修に参加した。 ○職朝、終礼、掲示板等でコンプライアンスについての啓発や研修を実施した。	B	○職員が計画的に参加できるよう、年度当初に研修の年間予定を提示する。 ○コンプライアンスについての職員研修、掲示物や職朝、終礼等での啓発を継続して行う。	
	○業務改善において時間外業務は前年度7%削減の達成状況であった。	○時間外業務の10%削減。	○毎月の衛生委員会で時間外業務時間削減状況について確認し、全職員へ報告する。	○教職員の意識が高まり、各々がタスクマネージメントに取り組み、時間外業務削減を行うことができた。	B	○毎月、衛生委員会で時間外業務削減状況について確認し、全職員へ報告することを継続して行う。	

評価基準 A : 十分達成 B : 概ね達成 C : 変化の兆し D : まだ不十分 E : 目標・方策の見直し
 [100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]